

各務原市移住・定住推進PT会議（第5回）議事要旨

1. 「各務原の世界観」について

（田中副市長より）

（世界観の作成については、）今までに経験のないことだったので大変だったと思うが、お願いした以上のものができた。このようなことを行うことは皆さんの人生の中でもあまりないのではないだろうか。

自分も20代前半の頃、暇な時間あるとよく考えていた。自分という人間を改めて思い返してみると、嫌なところや悪いところが目に見えてきて、自分を落ち込ませることもあったが、他方で、それを行ったにことより、ある時からその弱点を含め自分が好きになったことを思い出す。

今回メンバーにお願いしたのは、（移住してもらいたい具体的な人物像を具体化させるために、）自分自身を（その移住者に）シンクロさせてもらうプロセスであった。

おそらく改めて自分自身のことを見つめ直す時間になったかと思うが、それは自分だけに当てはまる話ではない。同じ悩みを抱えていたり、同じ境遇だったりする人はどこかにいるはずである。具体的な人物像を描き、その人に刺さるものを作ってもらいたいと思って、この作業をお願いしたもの。

提出された作品を一日中読み込ませてもらった。今日の会議では、各々の物語のコンセプトや価値観を話してもらい、それを皆でフィードバックしたい。

これらの作品をまとめたものが「映像」となるのか、それとも「文章」となるのかはまだ分からないが、今後施策パッケージを組んでいく上でのプロモーション素材として活用しブラッシュアップしていく考えである。

（メンバーの発表・意見）

- テーマは余裕のある生活にした。「自分」を取り戻し余白を楽しむ人生、家族のいる「今」に向き合う人生の2つを取り上げた。自由や余白を埋めるものが各務原市にはあるということが自分も気に入っており、市外に向けて発信していきたいと思っている。
- 「今しか得られない価値」というフレーズが好きだ。自分にも、家族にも、将来にも向き合えるというポイントは大切である。他方で「余白」という言葉は多くの地方都市にも当てはまってしまうため、「各務原の余白」には具体的に何が入っているかをもう一段深堀りしたのだろうか。
- 都会での暮らしに疲れた人を主人公にした。都会への憧れで一人暮らししたが、親も友達もらず、遠距離恋愛で孤独を感じている。地元には帰りたいが、親との同居はせず、岐阜や名古屋で職を探し、各務原に住む設定にした。ストレスを感じていた通勤時間が自分の好きな時間に充てることができ、物価も安いので金銭的な余裕が生まれる。自分の色に染まれるものがたくさんあることをアピールしたい。
- 地元回帰型の感情の振幅を非常によく捉えている作品。移住前と移住後で色（暗色と明色）を使い分けることにより、主人公の感情をうまく表現している。都会を悪者に行っているわけではなく、新たな自分を求めての移住。移住先でも一人暮らしを続けているが、家族に会おうと思えば会える「関係性の再接続」を表現している。（単に地元近くに）戻るのではなく、もう一度つながるという視点をもう深堀して表現できないだろうか。
- 「青春の選択肢」をテーマに、受験、就職の選択を自分で選ぶストーリーにした。何かに流されるわけではなく、自分で決めるという視点を持ちつつも、各務原市という地元を充分に楽しんでいる。大学進学、就職は市外になる可能性はあれども、「各務原市は楽しい」という種を蒔くイメージで作成した。
- 行政の施策が前面に出てこないのがポイント。友人や家族とのつながりなど、定住を決意させるのではなく、定住する理由になる「原体験」の蓄積は、若年層の定着施策としては重要な見方。主人公はまだ各務原の価値を自覚していないため、「未来への記憶」を入れることにより、一段

と深められるのではないだろうか。

- 「迷ったら各務原」をテーマに考えた。ネット上で仲間と都会の魅力や田舎の魅力を話し合ううちに、近隣のまちより各務原市が魅力的にあるように感じ、よその人から言われて魅力に気付くという設定にした。
- 異質ではあるが、好きな作品である。各務原には都会・田舎の両方の良さがあるということが良く分かるようになってきている。動画や絵など、分かりやすい方法で「忘れられない映像」を置くことができれば、世界観により厚みが増していくのではないだろうか。
- 2分ほどの動画のイメージで、台本を作成した。「あこがれは日常へ」がテーマ。現状パート、理想の一日パート、市での生活パートの3つにシーンを分け、主人公の妄想を基に、こんな日常を送りたいが、実はそんなまちは実際にあるというストーリーにした。観光的なPVにはしなかったもので、あくまで日常生活を意識して台本を作成した。
- 「映像企画書」に最も近い作品。家族が話しているシーンが行政の説明ではなく、「明日何をするかを家族で迷えること」自体が「豊かさ」であるという描き方が秀逸である。タイトルも本質的なものをとらえている。場所の説明ではなく、その場所で家族の誰がどんな表情をしたかに重点を置くことで、より刺さりやすい映像になるのではないか。
- 「一日の中に人生を取り戻す。」をテーマに作品を作った。仕事に追われ、不満のある生活が移住により改善できればという思いを込めた。憧れの生活をあきらめなくてもいいというメッセージをもう少しだけ出したい。
- 自分の時間がないことを「忙しい」で終わらせず、「人生が前に進んでいない」ことの不安として掘り下げられている。「仕事から帰ってからの人生が、はじまる。」は広告コピーとして磨く価値があると思う。もう少しだけ深めるのであれば、現在は「Before」の描写が圧倒的に強いので、各務原での「After」にも同じ解像度を与えることができれば、作品として花が開くはず。
- 共働き・子育て再設計型を意識し、「青と暮らす」をテーマに、色を青に絞って作成した。見上げた空の青色、川の青色、空宙博の外観の青色を家族のやり取りの中に散りばめ、各務原ならではの色を強調した。
- 世界観を「色」に変換した点で突出している。色の他にも、機械油の匂いや公園の緑の香り、風などへの感度も高く、五感への意識が最も高い作品である。家族とのやり取りから、各務原だからこそ成立する仕事・家族・都市への誇りの接続を表現しており、日常風景を色で記憶させることができる。「Before」の描写をもう少し掘り下げて書くことと、「青」が何を連想させるかまで意識して作成することで、もっと刺さる作品が出来上がるのではないか。
- テーマは「Will（未来）」。生活の変化が分かりやすくなるよう、夕方をクローズアップした作品を作成した。夕方に自宅に帰ってこられることで、余白のある生活が浮かび上がるという表現を行った。
- 非常に大切な場面を厳選して掴んでいる作品で、時間帯を夕方に絞ることにより意識が散らからない。共働き・子育て生活再設計型の核心であり、家族がお互いに「おかえり」「ただいま」と言える時間に帰れるようになったというフレーズのみで移住前後の人生の変化が伝わる。もう少し掘り下げるのであれば、「Will」が何を意味するのかを、もう少し物語で感じさせるような作りにできないだろうか。夕飯をつくる包丁の音、玄関の鍵が開く音、息子の声など、「音」を増やすことにより、作品の立体感が増すはず。
- 地元回帰型を意識し、20代後半の若者が日常の休日を楽しむイメージで作成した。
- 最も意図的に「観光PRから逃げた」作品。単身若年層には刺さりやすい。カフェ、ラーメン、サウナなどが移住に結び付くわけではないが、若者から見たら魅力的なものである。「なんでもない日常がむしろ良い」という気づきを与える作品。主人公の感情の変化をもう少し分かりやすく描くことで、魅力を再発見できたというような構図にできるのではないか。

- 26歳の女性の日記のイメージ。各務原市に来て、どんなことを感じたのかを記録として残すというもの。あえてまとまりのない感じにすることで、自分の感情を吐き出している印象を付けた。
- 読み物として秀逸で、これはもはや小説。最も自然に主人公の内面へ入っていける作品である。いかにも生活者らしいサイクルが入っていることで、「自治体が作った人物」ではなく「本当に各務原で暮らしている一人の女性」を感じることができる。既に文章としての完成度が非常に高いため、(心の動きが伝わるよう文章を推敲しながら)削っていく方向性。「各務原では日記の文字が増えた」という最後の一文に収れんするような作りかたができるのではないだろうか。

(田中副市長より)

10人の作品を並べることで、別々に作ったのに既に同じものが何度も現れ鮮明に浮かび上がってきている。広い空・夕方・家族・友人・余白など、これこそが「各務原の世界観の原石」であると思う。

次は、「色・音・景色・人・感情・時間・時間・価値」をもう少しだけ深く掘り下げ、その重なりを発見する作業としたい。そうすることで、10人の物語から自然発生した「かかみがはら世界観バイブル」の骨格が見え始めるのではないか。

次回、もう一度世界観を詰めて、その後は一旦施策のパッケージ化を進めることとしたい。

次回プロジェクト会議(第6回):9月8日10:00～ 於 本庁3F-1会議室